

## 慶運の自筆懷紙・短冊集成

稲田利徳

慶運は、南北朝期に為世門の和歌四天王と称され、頓阿・浄弁・兼好などとともに、歌壇に活躍した歌僧である。

しかし、彼の生存中に撰集された勅撰集には、「風雅集」にわずかに一首入集しただけで不遇であった。心敬の「ささめごと」<sup>注</sup>には、「中比、頓阿・慶運法師とて歌人あり。慶運は身の程や不肖なりけむ。毎々述懐をのみせしとなり。新千載集に四首入れられ侍るとて、撰者を九拝して涙をながし喜び侍りしに、頓阿が歌十餘首入りぬると聞き、後日にわが歌を切り出だし侍るとなり。」とか、「慶運法師今はの時、年来の詠草抄物、住みなれし東山藤もとの草庵のしりへに、みな埋み捨て侍ると也。道に恨みを残し侍るも情け深き事也」といった逸話を伝えている。それがあらぬか、中世の歌人としては、現存する和歌はそれほど多くない。纏まったものとしては、「慶運法印集」、「慶運百首」がある程度。前者は、元来、三百首からなっていた自撰家集であったようだが、現存資料では数首欠脱している。後者は、ある時期に一気に百首歌を詠じたものではなく、本人か他の人が、百首を撰歌したもののよう<sup>注</sup>で、両詠草間には約四十首ほどの重出歌がある。

この他、慶運の和歌は、「風雅集」「新後拾遺集」「新統古今集」の

各勅撰集、「統現葉集」「臨永集」「藤葉集」「松花集」などの私撰集の類、「朗詠題詩歌」「玄恵法印追善詩歌」「二条為世十三回忌品経和歌」「花十首寄書」「草庵集」「高野山金剛三昧院奉納短冊」などに散見する。また、書陵部には、「浄弁竝慶運集」(四〇六・二四)なる孤本が存し、そこに六十六首の慶運の和歌が収録されているが、この歌群には、既知の慶運の和歌と一致するものが一首もなく、表題のように慶運の家集かどうか確認されていない。この詠草の検討は最後に若干行なう予定だが、これを加算しても、現存する慶運の和歌は、およそ、五百首ほどで、特に多いわけではない。

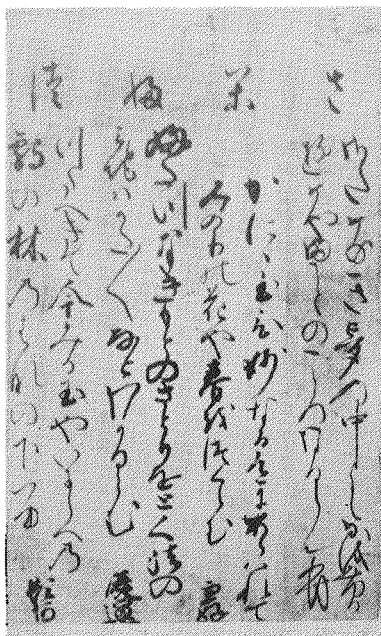
ここで売立目録類や古筆手鑑類を調査して、彼の自筆懷紙や短冊の集成を試みるのも意義あることと思うので、現在知り得たものを紹介しておきたい。

### 二

まず、慶運の自筆懷紙と称されるものから紹介するが、それに先立ち、筆跡鑑定のことも考慮して、現在、慶運自筆として、最も信頼できる、「高野山金剛三昧院奉納短冊」(尊経閣文庫蔵)のうち、慶運の短冊のある写真一葉を、『古文書時代鑑』から転載しておく(写真(1)参照)。

この一葉には、偶然、浄弁・兼好・頓阿、いわゆる和歌四天王の短

冊が並んでいる。この短冊の慶運の筆跡をみると、放棄で、力感溢れる感じを受ける。小松茂美氏は、慶運の筆跡に対し、「他の和歌四天王と同じく世尊寺流をよくした。その中でも、父浄弁の書風の影響を強く受けているのは当然のことであろう。筆線がわりあい細く、太細の変化に乏しいところなど浄弁とよく似ている」とその特徴を説明している。但し、ここに掲出の短冊の筆線は、他の歌人に比べて、必ずしも細いとはいえないようである。



(写真(1)「高野山金剛三昧院奉納短冊」)  
「古文書時代鑑」より

○懐紙関係

管見に及んだ慶運の自筆懐紙は、わずかに二枚である。父の浄弁が七枚あったのに比べてみても、極端に少ない。<sup>注4</sup>

(1)慶運和歌懐紙

詠二首味歌

慶運

野外花

たひねするのはらのさくら

さきにけりあさたつ末に  
かゝるしら雲

山家花

とふ人のもとたるらむ

山さとも花ミるはるは

さひしからぬを

この自筆懐紙は、大阪市の藤田美術館所蔵のものである。「花の歌懐紙 藤本慶運筆」(藤田美術館蔵)とある写真入りの「郵便はがき」で所在を知った。現物の閲覧を美術館に申請したが、許可されなかった。ここでは、葉書の写真版によって翻字した。書写その他は、現物に当たっていないので不明である。

(2)慶運詠草

十月八日 春 直 にて

慶運

うた、ねの中のかたミのますか、み

心みしよりむかしなりけむ

この懐紙は、昭和十年二月の『村瀬庸庵愛蔵品入札並賣立』目録(名古屋美術倶楽部)に掲載のもの。「十月八日」の日付けと詠歌場所を、「春」の次の字体が不鮮明で解読しがたい。一応、「直」と読んでおく、明示しているのか、かつて歌会に提出した和歌かと思われるが、それ以上のことは不詳。なお、写真掲載がないので確認はできないが、大正五年正月の『中村氏旧蔵品目録』(京都美術倶楽部)の品名目次の「慶運歌一首 うた、ねの」も同一物と思う。

○短冊関係

次には慶運の自筆短冊を紹介する。まず、先に触れた、自筆として最も信頼できる、「高野山金剛三昧院奉納短冊」から掲載しておく。この短冊の和歌は、『統群書類従』、『後鑑』、『大日本史料第六の八』などにも翻刻されているが、ここでは、尊経閣文庫蔵『宝積経要品』（複製本・尊経閣叢刊・昭和四年刊）によって、慶運のものだけ五首を抜書しておく。

(1)高野山金剛三昧院奉納短冊

- ① しな／＼にたつるミのりのくらぬ山  
のほりハて、もわか身なりけり 慶運  
さとりとハわかこゝろそとぎくにこそ  
をろかなる身ハ猶まよひけれ 慶運
- ② さ  
ふたつなきもとのさとりをとく法の  
ミちハかた／＼なとわかるらむ 慶運
- ③ ふ  
理智ふたつありともなにかわきていはん  
さとるもゝとのこゝろひとつを 慶運
- ④ り  
むすふてにゝこるハかりもなかりけり  
ふかきミのりの水のこゝろハ 慶運
- ⑤ む

(2)兼好・盛衰  
抄并・阿短冊四幅対

- ⑥ 萩  
かきりなくしけりにけりなふる里に  
わかうへをきしにはのおきハラ 慶運

この短冊は、大正六年十月の『京都上京某御典薬及其他書画』目録に掲載のもの。

(3)慶運法印短冊

⑦ 寄社祝

いと、しくくもらぬ御代のめくミかな  
あふく日吉の神のまに／＼ 慶運

この短冊は、大正六年十一月の『大阪某家所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。

(4)慶運短冊

⑧ 寄煙恋

しらせハやたくこの煙かせをいたみ  
つゐにけぬへきおもひありとも 慶運

この短冊は、大正七年十一月の『旧紀州藩<sup>平松</sup>兩氏所蔵品入札』目録に掲載のもの。初句「しらせハヤ」の「せハヤ」を見せ消ちにして、「れしな」とする。なお、昭和七年六月の『某家所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）にも、同じ短冊を掲載する。また、大正元年十月の『和歌山市谷口家所蔵品目録』の品名目次の「慶運短冊 寄煙恋」も、写真掲載がないので断定はできないが、同一物の可能性が強い。

(5)慶運白短冊

⑨ 早秋

秋きぬといふよりやかて  
身にしむ  慶運

この短冊は、大正七年十一月の『郷男爵家御蔵品入札』目録に掲載のもの。空白部分は、写真が不鮮明で判読できないことを示す。以下も同じ。

(6)慶運短冊

⑩ 歳内

ひと、せの、こる日かすハ冬なから  
立春 待かひありて春そきにける 慶運

この短冊は、大正九年の『小松原福井家御蔵品入札』目録に掲載のもの。

(7) 慶運短冊

⑪ 朝鶯 竹ちかくけさよりきなけうくひすの  
なかきとこねはいつくなるらん 慶運

この短冊は、大正十三年の『栗山善四郎蔵品入札』目録に掲載のもの。なお、昭和九年一月の『梅澤澁柿遺品入札』目録（東京美術倶楽部）に掲載の短冊も同一物である。

(8) 慶運短冊

⑫ 春雨 さすか又くもりもハてぬそらなから  
猶ハれやらて春雨そふる 慶運

この短冊は、大正十三年の『当市川上家所蔵品入札』目録に掲載のもの。なお、昭和二年の『肥前松浦伯爵家蔵品目録』（東京美術倶楽部）と、昭和四年の『某家御所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載の短冊も同一物。また、大正四年五月の『柏堂安藤清次郎氏所蔵品賣立』目録の品名目次の「慶運短冊 春雨」も、写真掲載がないので確認はできないが、同一物の可能性がある。

(9) 慶運短冊

⑬ 秋夕 なにゆへとしらぬたものつゆけきハ  
涙や秋のゆふへなるらむ 慶運

この短冊は、大正十五年二月の『蜂須賀氏所蔵品入札並賣立』目録（名古屋美術倶楽部）に掲載のもの。

(10) 短冊帖二冊

⑭ 竹 山さとのその、くれたけ今よりハ  
世のうきふしのきこえすもかな 慶運

この短冊は、昭和三年五月の『公爵島津家蔵品入札目録』に掲載のもの。

(11) 頓阿・浄弁・兼好・慶雲短冊四幅対

⑮ 雪 みせハやなましハかりふくかたをかの  
いほの、きハにつもる白ゆき 慶運

この短冊は、昭和四年五月の『藤田男爵家蔵品入札目録』（大阪藤田家）に掲載のもの。

(12) 慶雲短冊

⑯ 萩風 秋の色もまたミえわかぬおきのハに  
あらハれわたるかせのをとかな 慶運

この短冊は、昭和六年三月の『某家御所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。

(13) 慶運短冊

⑰ 炭竈 山ひとのすみやく煙たえくに  
見えつるあとも雪そつもれる 慶運

この短冊は、昭和六年十月の『松浦伯爵家蔵品入札』目録に掲載のもの。

(14) 慶雲短冊

⑱ 寒蘆  
なにハかた入江のあしのよもすから  
かれハさやきてうらかせそふく 慶運

この短冊は、昭和七年十一月の『某大家所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。

(15) 慶運短冊

⑲ 初廬  
をとめこか袖ふる山の秋かせに  
さそハれきぬる衣かりかね 慶運

この短冊は、昭和九年四月の『青地家御蔵品展観入札』目録（東京美術倶楽部）に掲載のもの。

(16) 慶運短冊

⑳ 海眺望  
あしのやのなたのしほちの朝なきに  
こきいて、ミレハうら風そふく 慶運

この短冊は、昭和十一年十月の『岡山市尾谷家並某家蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。

(17) 慶運短冊

㉑ 春雪  
吉野山たかねの春ハいかならん  
猶あハ雪のふるさとのそら 慶運

この短冊は、昭和十四年五月の『当市白水庵所蔵品入札』目録（大阪美術倶楽部）に掲載のもの。因みに、大正四年十月の『松山池田家所蔵品入札』目録の品名目次の「慶運短冊 春雪」も、写真がないので確認できないが、同一物である可能性が強い。

(18) 慶運短冊

㉒ 冬  
清龍河  
冬さむミこほりにけらしきよたきや  
かはせのなミのこゑそすくなき 慶運

この短冊は、昭和十五年二月の『翠雪軒所蔵品入札目録』に掲載のもの。

(19) 慶運短冊

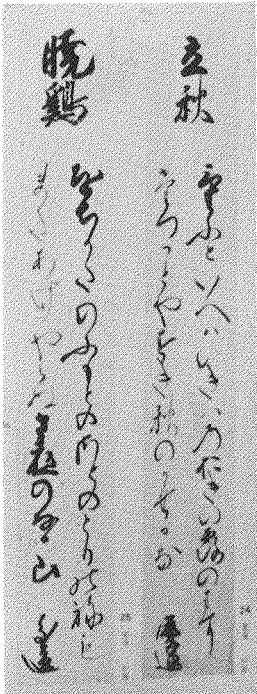
㉓ 別  
たのむへき命ならねハたひ衣  
たつひやなかきわかれならまし 慶運

この短冊は、伏見宮旧蔵『短冊手鑑』（日本古典文学影印叢刊16）に貼付のもの。

(20) 慶運短冊

㉔ 立秋  
けふといへハのきハのおきの露のまに  
たつことやすき秋のかせかな 慶運

この短冊は、小松茂美氏著『日本書流全史』に掲載のもの。但し、所蔵者は不記。なお、同氏編の『日本書蹟大鑑第六巻』にも同一短冊が掲載されている。（写真(2)参照）



(写真(2)『日本書蹟大鑑』より)

(21) 慶運短冊

⑲ 七夕  
まちわふるちきりなりともいつはりの  
つらさハしらしほしあひのそら 慶運

この短冊は、小松茂美氏著『日本書流全史』に掲載のもの。伏見家  
旧蔵手鑑に貼付されている由。

(22) 慶運短冊

⑳ 霞  
みわたせハよものこのめの春の色を  
いと、ふかめてたつかすみかな 慶運

この短冊は、小松茂美氏著『日本書流全史』に掲載のもの。保坂潤  
治氏旧蔵手鑑に貼付されている由。

(23) 慶運短冊

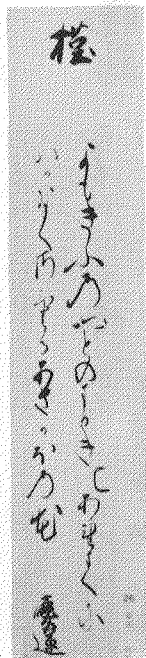
㉑ 暁鶏  
をちかたのふもとのさとのとりのねも  
またあけやらぬさ夜のなか山 慶運

この短冊は、小松茂美氏編『日本書蹟大鑑第六巻』に掲載のもの。  
所蔵者は不記(写真(2)参照)。

(24) 慶運短冊

㉒ 槿  
よもきふのやとのまかきのあれまくに  
ハかなくさけるあさはかほの花 慶運

この短冊は、小松茂美氏著『日本書蹟大鑑第六巻』に掲載のもの。  
所蔵者は不記(写真(3)参照)。



(写真(3))『日本書蹟大鑑』より

(25) 慶運短冊

㉓ 若草  
やきすてしのはらにもゆるわか草の  
ひとりもふかくかすむ春かな 慶運

この短冊は、『慶安御手鑑』(慶安三年刊)に模刻されているもの。  
因みに、明治四十五年六月の『故加藤喜作氏第二回入札目録』に、品  
名目録として、「慶運短冊 若草」とみえるのも、写真掲載がないの  
で確認はできないが、同一物かもしれない。

(26) 慶運短冊

㉔ 霰  
をのつから見えつるゆめにしられけり  
夜ハのあられのとたえありとハ 慶運

この短冊は、高知県の金剛福寺にある短冊模写のうちの一枚で、自  
筆の現物ではない。

(27) 慶運短冊

㉕ 渡月  
おしむともかひやなからんしかすかの  
わたりの月のあけかたのそら 慶運

この短冊は、東山御文庫蔵『短冊手鑑』(書陵部蔵マイクロファイル  
ムによる)に貼付されているもの。

(28) 慶運短冊

③② 浦船 　　ふく風やおなし心にまちつらむ  
いつれハいつるうらのともふね 　慶運

この短冊は、短冊模刻本『眺望集』（文政七年刊）に掲載のもの。

(29) 慶運短冊

③③ 霜 　　見わたせハかれのゝをさゝ風さえて  
いとゝ霜をく昨日けふかな 　慶運

この短冊も、短冊模刻本『眺望集』（弘化四年刊）に掲載のもの。

四

慶運の自筆懐紙二枚と自筆短冊三十三枚を紹介してきた。

煩瑣になるので、懐紙・短冊の各々の所では触れなかったが、目録掲載の写真版で見る限り、その筆跡は、「金剛三昧院奉納短冊」のそれと比較し、極端に異筆なものはなく、互に近似しているとみてよい。署名も、写真(2)にみえるように、二つのタイプがあるが、これは、「金剛三昧院奉納短冊」の五枚のうちにもみえることであり、問題にするにあたらない。以上紹介したものには、自筆として信頼してよいものが相当数あるとみてよからう。

次に、これまで紹介した和歌を、手製の『慶運全歌集全句索引』に当たってみたが、一致するものは一首も認められなかった。この現象は、浄弁の場合と同じである。

最後に、これまで慶運の家集として確証がとれていない、書陵部本『慶運集』に触れておく。

もし、ここで集成した三十六首の歌のなかで、一首でも、この「慶運集」と一致するものがあれば、慶運の家集としての信頼度は増すのであるが、残念ながら、一首の一致歌もないし、珍しい措辞の一致するものもみいだせない。

ただし、「慶運法印集」と書陵部本「慶運集」とを比較すると、若干、近似の発想や措辞を有する歌がみいだせる。

歌人は普通、マンネリを避け、新しい発想や措辞の創造を庶幾する。けれども、多くの詠歌のなかには、意識的にしろ、無意識的にしろ、近似の措辞や発想の歌を詠ずることがありがちである。従って、この観点から分析することは、書陵部本「慶運集」が慶運の家集であるか否かを傍証できることになる。近似の措辞や発想に着目し、以下、メロ的に列挙してみたい。

寄閑恋

A あふさかのせきのせきもりなれをしぞこえしむかしのかたみとは  
見る 〔慶運法印集〕・二二八

逢不逢恋

B 逢坂の関の関もり同じ世にまた立かへるしるべともなれ

（書陵部本「慶運集」・四五）

（以下、「慶運法印集」の歌をA、書陵部本「慶運集」の歌をBとする）このA Bの両歌は、ともに恋歌であるが、傍点部分の上二句が一致する。「逢坂の関の関守」なる措辞をとり込んだ早い例は、「堀川百首」の、

あふさかのせきのせきもりいでてみよむまやづたひのすずきこゆなり  
（匡房・一四一〇）

の歌であろう。この措辞は、リズムカルで印象鮮明であるが、そのためもあつてか、あまり後代の歌に取り込まれていない。「新編国歌大観勅撰集編」、「新編国歌大観私撰集編」、「統国歌大観」などの索引類

を繰ってみても（以下、これらを「索引類」と呼ぶことあり）、わずかに、

あふさかのせきのせきもり心あれやいはまのしみづかけをだに見む

〔新勅撰集〕恋二・七五二・隆季

の一首をみいだした程度で珍しい措辞である。この点からみても、AとBの歌の措辞の一致は注意されるが、加えて、逢坂の関の関守に、恋人に逢えた「かたみ」を見ると言い（A）、現世で再び逢える「しるべ」となってほしいと願うあたり（B）、発想も近似する。

#### 逢恋

A年月のうきにこりぬをちぎりにてなびく心もある世なりけり

#### 初逢恋

B年月のつらさにこりぬ心こそめぐりあふべき契なりけむ

（二〇七）

この二首の上二句は、「うき」（A）と「つらさ」（B）の若干の相違はあるものの、ほぼ同じ措辞といつてよい。しかも、長い年月にわたって恋人に逢えない憂さや辛さに懲りないで、長く耐えることで、やっと逢う瀬を遂げることができた―その心を「ちぎり」と認識している発想も近似する。珍しい発想だけに、A Bが同一歌人の歌である可能性が強くなる。

#### 山月

Aすみのほるとやまの月にきこゆなりまさきかつちるあきかぜのこゑ

#### 月

B庵結ぶ外山の月は影更てまさきかつちる散秋の淋しさ

（二二八）

この両歌も、「外山の月」と「まさきかつちる」の二つの措辞の一致がある。まさ木が散る歌として著名なのは、源俊頼の

日くるればあふ人もなしまさきちる峰の嵐のおとばかりして

〔新古今集〕・冬・五五七

の歌であり、さらに、この歌に触発され、

み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり

〔古今集〕・神遊歌

を本歌にした、西行法師の、

松にはふまさきのかづらちりにけり外山の秋は風すさぶらん

〔新古今集〕秋下・五三八

の歌もよく知られた歌である。

A Bの歌も、これらの歌の影響下になったものだろうが、さらに「まさきかつちる」の措辞を索引類に当てみると、わずかに、

ここにしもさぞなふもとのやどなればまさ木かつちる山おろしのかぜ

〔新撰六帖〕・三六九・信実

の一首をみいだしただけである。A Bの両歌は、この「まさきかつちる」の珍しい措辞の一致だけでなく、ともに「外山の月」を配して、秋の寂寥さをうつしだそうとする発想も類似している。

#### 袖露

Aこゝろなき草木はさぞなはらふだにたもとにあまるあきのゆふ露

#### 薄

B風渡る野べの尾花をつたひ来て袂にあまる夕暮の露

（二〇二）

この二首は、第四句の「たもとにあまる」の措辞が一致し、しかも、その対象も、夕方の「露」と同じである。「たもとにあまる」という措辞は、ごくありふれた表現のようにも思えるが、索引類を繰つても、わずかに、

なにごととあやめもわかでけふもなほたもとにあまるねこそたえせ



ね

〔新古今集〕・夏・二二四・紫式部  
の一首だけなのは意外である（この歌は、「紫式部集」にも収載）。加  
えて、書陵部本「慶運集」には、

梅

立なる、木のひともの梅が、もたもとにあまる花盛りかな

（四）

の歌もあり、「たもとにあまる」は、慶運の好んだ措辞ではなかったか、  
といった臆測もされてくる。

書陵部本「慶運集」の六十六首を、歌風の立場で読んでみても、二一  
条派的であって、特に異質な感じも受けない。しかも、先にあげた、  
四つの、比較的珍しい措辞の一致や発想の近似などをも勘案すると、  
この家集は、表題の示すように、慶運の家集とみてよい可能性が、相  
当濃厚になってきたと思われるが、なお、詳細は別稿を用意すること  
とし、ここではメモ程度にとどめておきたい。

注1 日本古典文学大系本による。

2 拙稿「慶運法印集」について」（中世文芸第46号）。

3 『日本書蹟大鑑第六卷』解説。

4 拙稿「浄弁の自筆懐紙・短冊集成」（岡山大学教育学部研究集録第67号、昭  
59・10）参照。

（昭和60年4月12日受理）